式辞

　長く厳しい寒さもようやく和らぎ、周囲の山並みや校庭の木々も一段と生気にあふれ、本格的な春の到来を目前に控えた今日の佳き日、ご多忙の中、香川県教育委員会委員　藤澤茜様、香川県議会議員　大山一郎様、ＰＴＡ会長　森田光弘様をはじめ、多数のご来賓並びに、保護者の皆様のご臨席を賜り、誠にありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

　さて、ただ今卒業証書を授与した二百七十四名の卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。皆さんは三年前の令和二年四月九日に西高に入学してきました。コロナ禍による厳戒態勢で挙行した入学式、そして入学から１週間もたたないうちの休校と、担任の先生の顔すらわからない、もやっとした日々がしばらく続きました。そして、ようやく授業が再開されたのが二月後。「晴れの船出」というには程遠い状況であったと思います。休校中の約二か月間、我々教職員は、密（みつ）を避けるために武道場で職員会議を行い、手洗い場を玄関付近に設置するなど、皆さんとともに学校生活を送るための準備を必死になって行いました。そして皆さんが登校したとき、学校に生気がよみがえりました。

以来、今日（きょう）にいたるまで、皆さんは、暑い日も寒い日もあの坂を登り続けてきました。ここで仲間と出会い、未来への夢を抱き、様々なことに全力で取り組んできた、その一つ一つが、今なお鮮明に思い出されるのではないでしょうか。私の目には、皆さんが学習に取り組む姿や、部活動などで自分の限界に挑む姿が焼き付いています。

　文化祭や体育祭、修学旅行などの行事をすぐに中止にするのではなく、対策を講じながら楽しんでやり切ったこと。日常とは異なる行事の中で、楽しい時を過ごし、友との絆を深めたことでしょう。

部活動では、自分の限界に挑み、技量を高める姿がありました。昨年の夏の高校野球では、準決勝まで駒を進め、強豪校に善戦しました。先取点をとったとき、ほぼ満席の３塁側のスタンドが大きく沸き上がり、私自身、その様子が、誇らしくも感じました。また、書道部がパフォーマンスで披露してくれた「われら志を貫く」という、強い想いのこもった作品からは、身震いするほどの感動をいただきました。

そして日々の勉学。教室の中はもちろんのこと、放課後遅くまで、職員室の周辺や廊下で、黙々と問題に取り組んだり、熱心に先生方に質問したりする様子が、今も目に浮かんできます。皆さんの活動の足跡は、創立四十七周年を迎えようとする西高の歴史に新たな一ページとして加わるとともに、後輩たちのよきお手本ともなっています。

さて、今、世界は激動と混迷の中にあります。現代を称して「予測不能の時代」とよく言われますが、私自身のこれまでの経験の中でも、「激動」「混迷」という言葉が、今ほど強く実感を伴って響いてくることはありません。これまで私たちは、かなり長い年月をかけて積み上げてきたものが、短期間のうちに崩れ去るのではないか、そんな危惧を抱きます。未来を生きる人たちに必要なことは、いかに社会が変化しようと、主体的に、よりよく問題を解決しようとする姿勢と、周囲と協調し、他人を思いやる心であると考えます。

私は入学式の式辞でこのように述べました。

「卒業する時に、『それでも高校生活はよかった、充実していた』と思ってほしいのです。」（２秒）

その昔、絶望的な状況を生き抜いた心理学者がいました。その人の名は、ヴィクトール・エミール・フランクル。彼は、どんなに苦しいときも、仲間を励まし、決してユーモアを忘れず仲間と笑いあい、そして皆で「それでも人生にイエスと言おう」と、歌を歌ったそうです。「それでも人生にイエスと言おう」という言葉から、何をおもいますか。この「それでも」という部分が大事です。

私はこの言葉を、次のように理解しています。

「人生は、それ自体にいいことや悪いことがあるのではなく、何かをするチャンスが人生そのものである。辛いことや、理不尽と思われるような運命があるからこそ精神的に成長ができる。置かれた状況を自分事としてとらえて、最善を尽くしてきた、そんな自分の人生は素晴らしい。」。

今、皆さんは『それでも高校生活はよかった、充実していた』と思うことができているのでしょうか。

皆さんの中には、今まさに、人生の寒く苦しいところを歩んでいる人がいるのかもしれません。昨年は哀しいお別れもありました。また、これから苦しいことにも多々遭遇することでしょう。　でも、やがてそれは過去になります。過去は捨てることができず、現在は止めることができません。しかし未来はこれから決めることができます。みなさんは、これから、何かを成し遂げたとき、苦しかった過去を笑顔で思い返すことができるでしょうか。西高の「自立（自分事として）・連帯（みんなと一緒に）・創造（解決を図る）」という教えを、皆さんがこれから生きていくうえでの必須アイテムとして持ち続け、困難から逃げずに頑張ってほしいと思います。今はこの場所にいない小比賀先生、転勤された先生方、そして今ここにいる西高の仲間たちは、離れていてもきっと皆さんの心の支えになるはずです。ときどき、ふとあるときに、「ふわあ」と思い出してほしいと思います。

　保護者の皆様におかれましては、立派に成長されたお子様の姿をご覧になり、感慨もひとしおのことと存じます。お子様たちは、マスク越しに、明るく素敵な笑顔で「おはようございます」「ありがとうございました」などと声をかけてくれました。生徒一人ひとりの顔をおもいうかべたとき、本校で切磋琢磨し、立派に成長した姿があり、そのことを私自身が本当に誇りに思います。今日の日を心からお喜び申し上げるとともに、これまで本校に賜りましたご理解、ご支援に対し、厚くお礼申し上げます。ありがとうございました。

　卒業生の皆さん、通い慣れた坂も西高生としては、あと一回下るだけとなりました。式の後、皆さんをこれまで育て、支えてくださった人たちの想いに対して、一言、感謝の言葉を伝えてほしいと思います。私自身、最近、言葉に手抜きをしないことの大切さを痛感しています。「ありがとう」と「ごめんね」は、わかっていると思っても、繰り返し言わなければいけない言葉です。

皆さんの今後の活躍と、その前途に幸多きことを祈念して、式辞といたします。

令和五年三月三日

香川県立高松西高等学校

校長　　槌　谷　昌　晃